

鼻

芥川
竜之介



一册堂青安文库

鼻

芥川龍之介

禅^{ぜん}智^ち内^{ない}供^ぐの鼻と云えば、池^{いけ}の尾^おで知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇^{うわくちびる}の上から顎^{あご}の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸^{ちようづ}詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥^{しゃみ}の昔から、内道場^{ないどうじょうぐふ}供奉^{こんぶ}の職^{のぼ}に陞^{しょう}った今日^{こん}まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論^{もちろん}表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念^{ぜんねん}に当^{とう}来の浄土^{じやうど}を渴仰^{かつぎやう}すべき僧侶^{そうりよ}の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つた

からばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧おそれていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは實際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が銃かなまりの中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子ちゅうどうじが、嚏くさめをした拍子に手がふるえて、鼻を粥かゆの中へ落した

話は、当時京都まで喧伝けんでんされた。――けれどもこれは内供にとって、決して鼻を苦に病んだ重おもな理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家しゅつけしたのだらうと批評する者さえあつた。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩わずらわされる事が少くなつたと思つていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実_{じじつ}に左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損きそんを恢復かいふくしようと試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫くふうを凝こらして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖ほおづえをついたり頤あごの先へ指をあてがつたりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえつて長く見えるような氣さえした。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の経机きようづくえへ、観音経かんのんぎようをよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を氣にしていた。池の尾の寺

は、僧供そうぐこう講説などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従つてここへ出入する僧俗たぐいの類も甚だ多い。内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺すいの水干かんも白の帷かた子びらもはいらない。まして柑子色こうじいろの帽子や、椎鈍しいにびの法衣ころもなどは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。——しかし鍵鼻かぎばなはあつても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従つて、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐としがいもなく顔を赤らめたのは、全くこ

の不快に動かされての所為しよゐである。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようとさえ思った事がある。けれども、目連もくれんや、舍利弗しゃりほつの鼻が長かったとは、どの経文にも書いてない。勿論竜樹りゆうじゆや馬鳴めみようも、人並の鼻を備えた菩薩ぼさつである。内供は、震旦しんたんの話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かったと云う事を聞いた時に、それが鼻だったら、どのくらい自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜からすうりを煎せんじて飲んで見た事もある。鼠いばりの尿を鼻へなすって見た事もある。しかし何を

どうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子でしの僧が、知己しるべの医者から長い鼻を短くする法を教わつて来た。その医者と言うのは、もと震旦しんたんから渡つて来た男で、当時は長樂寺ちやうらくじの供僧ぐそうになつていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは氣にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度毎に、弟子の人数をかけるのが、心苦しいと云うような事を云った。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏ときふせて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、

内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従ちようじゆうする事になった。

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹ゆでて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提ひさげに入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷やけどする惧おそれがある。そこで折敷おしきへ穴をあけて、それを提の蓋ふたにして、その

穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸^{ひた}しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹^ゆった時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸^むされて、蚤^{のみ}の食つたようにむず痒^{がゆ}い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立つている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下^{うへした}に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿^はげ頭を見下しながら、こんな事を云った。

——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼うわめを使つて、弟子の僧の足に輝あかぎれのきれているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。實際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえつて気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒あわつぶのようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば毛をむしった小鳥をそっくり丸灸まるやきにしたような形であ

る。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云った。

——これを鑷子^{けぬき}でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子^{けぬき}で脂^{あぶら}をとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎^{くき}のような形をして、四分ばかりの長さ^さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような

顔をして、

——もう一度、これを茹でばようござる。

と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなつた鼻を撫なでながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極きまりが悪るそうにおずおず覗のぞいて見た。

鼻は——あの顴あごの下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅わずかに上唇かの上で意気地なく残喘ざんぜんを保っている。所々まだら

に赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕あとであろう。こうなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。――鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはしないかと云う不安があつた。そこで内供は誦經ずぎようする時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀ぎようぎよく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下つて来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫ほでて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書写ほけきようの功を積んだ時のような、のびのびした気分になつた。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかつた下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。――

勿論、中童子や下法師が晒わらう原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かった昔とは、晒うのにどこことなく容子ようすがちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽こっけいに見えるようすと云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのようにつけつけとは晒わなんだて。

内供は、誦ずしかけた経文をやめて、禿はげ頭を傾けながら、時々こう呟つぶやく事があった。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍かたわらにかけた普賢ふげんの画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を憶おもい出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。——内供には、

遺憾^{いかん}ながらこの問に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾^{むじゆん}した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥^{おとし}れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

そこで内供は日毎に機嫌^{きげん}が悪くなつた。二言目には、誰でも意地悪

く叱^{しか}りつける。しまいには鼻の療^{りようじ}治をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳^{ほうけん}貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯^{いたずら}な中童子である。ある日、けたたましく犬の吠^ほえる声がするので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片^{きれ}をふりまわして、毛の長い、痩^やせた彪^{むくいぬ}犬を逐^おいまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囃^{はや}しながら、逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持^{はなもち}上げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨^{うら}めしくなっ

た。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸ふうたくの鳴る音が、うるさいほど枕に通かよつて来た。その上、寒さもめつきり加わったので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつになく、むず痒いかゆのに気がついた。手をあてて見ると少し水気すいきが来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花こうげを供そなえるような恭うやうやしい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏いちょう

や橡とちが一晩の中に葉を落したので、庭は黄金きんを敷いたように明るい。
塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪くりん
がまばゆく光っている。禅智内供は、蔀しとみを上げた縁に立って、深く息
をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って来た
のはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜ゆうべの短い鼻で
はない。上唇の上から顴あごの下まで、五六寸あまりもぶら下っている、
昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなった
のを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなった時と同じよう
な、はれはれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じ

た。

——こうなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁ささやいた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。

（大正五年一月）

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
